

p17-p21=5

一行アキ

と解説してなる。西鶴の
用例はむしろ字義の本
末の近いものであらう。

西鶴のつかつた文字
真山青果



次は佐藤氏は、動詞形容詞の一字の用法

のうらふ、點ゆかぬものとし、
下記のこと

き諸例を挙げるに於て、
同じく註記を試る。

○捨を、
○借を、
○悩を、

○捨を、
○借を、
○悩を、

○愧を、
○開を、

〔註記〕

捨をすなると訓は、
あな

からに異例とは思はれな
組練の譯文

かたき聲へス
トリアケテ用ヒ

ドノフトナリ
借を貸すの意に

ありて、
現代解釋の如き

區別はなかつたの
伊呂波

類妙には、
カスと

此よませ
字鏡集はその
貸

10 20 相馬屋敷

85 80 75 70 65 60

ル とも、カスとよませく
も同様か
なるはかり
ではなく、
今日

の普通辞典 ~~見~~、
とあるものが多い。古事類苑、
律例をひいて、
とあるものが多い。古事類苑、
律例をひいて、

ヲ備ルコトトシ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、
借ルコトトセリ、

No. ~~1~~ 2

合まると
 の、はがかし
 に解しては誤って
 ると、の間には、
 とを忘るはな
 し、田舎人は
 るといふ
 鉦の最初には
 つかしい人で
 い。舞を、か
 次は佐藤氏は
 とく列挙し、
 ○此を織物の
 も空間にも、
 無差別に常用
 をあた(仇又は徒)
 織筋の織物に編
 10 20 相馬屋敷

るは、
 の、はがかし
 に解しては誤って
 ると、の間には、
 とを忘るはな
 し、田舎人は
 るといふ
 鉦の最初には
 つかしい人で
 い。舞を、か
 次は佐藤氏は
 とく列挙し、
 ○此を織物の
 も空間にも、
 無差別に常用
 をあた(仇又は徒)
 織筋の織物に編

合まると
 の、はがかし
 に解しては誤って
 ると、の間には、
 とを忘るはな
 し、田舎人は
 るといふ
 鉦の最初には
 つかしい人で
 い。舞を、か
 次は佐藤氏は
 とく列挙し、
 ○此を織物の
 も空間にも、
 無差別に常用
 をあた(仇又は徒)
 織筋の織物に編

一カアケル

一カアケル

合まると
 の、はがかし
 に解しては誤って
 ると、の間には、
 とを忘るはな
 し、田舎人は
 るといふ
 鉦の最初には
 つかしい人で
 い。舞を、か
 次は佐藤氏は
 とく列挙し、
 ○此を織物の
 も空間にも、
 無差別に常用
 をあた(仇又は徒)
 織筋の織物に編

して、細川雙方和賤の暖有なるとありて

、最初は和議調停の意味なる、

車語としく使はれたが、後世には示談内濟の

意の法律用語となつて、幕府制令にも明らく

の文字を使用してゐる。暖の字は俗字ながら

當代にひろく慣用と化してゐることには

の續は、安永隨筆その他にも説がある、

ふまゝでもよい。然し當代に於て積字を昔

いて、積病の意、小辭し得た人は笑何ある

だうう。改めて過るは改めざるを宜しと

、流俗のまゝ流俗のまゝは當然の事であらう。

と書くは、未考。それと百歌に境の瀆と

明記せらるゝありたりと記憶す。なほ調

査すべし。

〇合子としくは、目偏に覺て、マニク

〇木偏に綿で、マニクものん、

〇大とカとを重ね合せて、マニク

〇人偏に風で、マニクあだと訓ません例か見え

る。

註記 以上の諸例は

No. ~~5.~~ 5.

小て、一見西鶴の造字らしくも^見けるが、
佐藤氏の^他外、西鶴の新造文字とし
て~~論じて~~論じて^なる人があつた

（[）] 凌して西鶴の故郷ではない。それ等の

大半は所謂新在家文字と称せらるゝもの

小属して、当時の連歌師俳諧師の間小は

必要欲くべからざる慣用文字であ^{つた}る^作向^上小

去嫌その他のむつかしき制限あるため小

、^{かゝる}新字を新造して^{その}抵觸を避けたも

のであつて、俳諧流行の西鶴時代小あり

ては、一般世間小も通用する慣用文字で

あつた^{らしい}。新在家文字の変遷及び

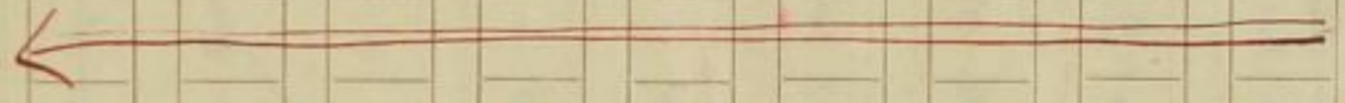
その創製小ついては、筆者小多少の管見

もないでもないが、煩瑣をゆ^え厭ふため小

あつては^憚てを省思する。

フク

誤リで	〇三水に泰を、	「みふ」としんつは	〇手倫よ夕で、	「しやく」と訓ませんのは杓の
「誤」の誤リであらう。				
に字書を檢するは	著者のいふ通りであらう			
「」の自石の同文通考に	当時流用の「誤」字を			
あかたるなかに、	三水に泰字を、	俗に「誤」		
「字」と註し、	木偏に夕の字を置いとく、	杓		
也」と書いてある。	(佐藤氏は手偏に夕と			
あるが、	原水は木偏ではなからうか)。	誤		
字は誤字として	も字字高に	「みふ」としんつは		
の誤字は、	世間通行の	誤字であつて、	西遊人	



山々の真を仕はすべきものではあるまい。文学のひらけたる今日
 日山放てさへその例は枚数千小皇なきほどである。

~~要するに、この例は、~~

○ 河岸といふ語を、牛備に可の字と、手備

(或は木備)に戈の字との二字を書いたぬが

それを含今日活字本には、「柯材」としてぬ

るのが多い。本書でもそれに従ったが、突

は如何なる字か止しいのが問題である。○

また、枚(まい)を手備に文としてあるのも

誤りであらう。 (註記) この疑問は、

者の粗忽 ~~おろそか~~。今普通河岸と書きて

「かし」と讀むのは、本義を誤り使用をも

誤つてゐる。我河は倭名類聚抄には、唐

韻云、我河。所以擊舟」とあり、類聚名

抄には、「我河カシ」とあって、もと船をつ

まぐ、「もやひ枚」の名である。然るに後

誤つてこれを河岸と書き、更にその字形

によりてカシはカハギシの約音なりなど

云ふ ~~誤~~ 説を生 ~~おろそか~~ のである。箋註倭名類

抄、我河の条に、出雲風土記萬葉集を引

證しく、即チ是也、今真人 ~~カ~~ 高ヲ水中ニ植

テ、次テ舟ヲ繫キ、之ヲカシヲフルト

一行アケル

謂フ。江戸ノ俗、涯岸ノ舟ヲ駁手ガベキ也

サイフヲ加^{カシ}トクスハ、蓋シヌノ轉^{カシ}ケリ

。或書ニ所岸ニ^ツク^ツリテ、^ギカハ^キハ^シノ約

トセルハ、是レヲ非トス^レと云^フク^ル也

ので明^カかであらう。半偏文字と枚とす^ル

のは、^應勘定方の記録慣例^ヲ調^ベテ^ハ思^ハふ。

穎原退蔵氏の校註日本永代蔵^及び校註^五

間胸算用^{等小はその他}註記をもつて数々西鶴の^{措辞}

の疑惑をいだき^{いく論評を下し、時山は}その本文の文字

を置き改めたる箇所さへある。然し^はから

仔細^{等小はその他}の^詳箇所を^雑検査するの^小西鶴の誤

記誤用といふよりは、修正者その人の疎漏

又は~~本~~粗忽^小によるもの、方^ハ多いやう^小

思はれる。藤村恬士の西鶴文章論、玉井教

授の西鶴修辭論^{指遺要}について管見を述ぶるを概

會として、穎原氏の^{指遺要}校^見多^数の^小について

稿をあらためて愚見を記してみたいと思ふ

(終)